

〔キャスト〕♀ 1人 ♀ 鈴木美奈・・・高校3年生・アニメ部(らしい)・母子家庭(らしい)

やかましいセミの鳴き声。
真夏の太陽が差し込む誰もいない学校の教室。
後ろの黒板に大きな文字で「めざせ甲子園」と書いてあり、その他色とりどりの小さな文字や絵が描いてある。
しばらくしてから大きなバックパックを背負った鈴木美奈がドアから教室に入ってくるとタオルで顔を拭く。

「ふわあー。
こうりゃマジ蒸し風呂だね。
誰もいないしなー・・・
あーあ、制服なんかで来るんじゃないかったよ。
あ、だけどあたし制服しか着るもんねえんだよなー、実際。
もしかして、制服着ちゃいけないってことはねえよな？
一応こないだまで高校生だったんだし・・・
母さんなんか、『あんたしばらく制服で店に出なさいよ』なんて言い出すしなあ・・・
飲み屋にセーラー服だよ！
そりゃさすがにちょっとヤバイだろ。」

ぐちゃぐちゃに進路関係の本や教科書類や辞書などが突っ込まれている書棚の中からうちわを見つけてとると、体中あちこちをしきりにあおぐ。
うちわを置くと

「はあ、あっぢい・・・
疲れたあ！」

教室を見回して

「相変わらずきったねえなあ。」

教卓の上に積んであるプリントが何枚か落ちているのを拾う。

「夏補習の課題か・・・
やっぱ学校やめて正解だよ。
こんなくそ暑い教室で、勉強なんかできるわけねえだろ。
今時クーラーもないなんて、日本全国探しても学校くらいだって・・・
しかも赤点の人間集めてさ、授業になるわけがないじゃん。
意味わかんねえよなー。」

落ちていたプリント類を全部拾い集めて、教卓の上にまとめて置く。

「あー、何かイライラしてきた。
あたし、嫌いなんだよ、汚いのさあ・・・」

掃除道具入れの中からほうきを出してはき、チリトリでゴミ箱にゴミを集める。

「ゴミも捨ててねえじゃん・・・」

ゴミ箱の中の袋をまとめて持つ。

「(何かかけ声)・・・
えらい重たいなあ。
一体何入ってんだよ。」

ゴミ袋をいったん置くと、袋の口を開けてのぞこうとするが

「うわ何か嫌なにおい！」

あわてて袋から飛んで逃げる。
気を取り直し、再び袋に近づきのぞこうとするが

「やめとこ、変な物入ってたやだから。」

ゴミ袋を廊下に出し又戻って来るとタオルで顔を拭く。

「あー、腰に来たわ。
嫌だな、オバサンみたいで・・・」

ところでアタシ、何しに来たんだっけ？」

しばらく考え込んでいるが

「そうだ！
荷物持って帰るんだった。」

真ん中くらいの席についてバックパックを置き、机の中から乱雑に入っている教科書等を出して机の上に積んでいくが

「何じゃコリヤ？（女子の体操服が出てくる）
アタシこんなの入れてたっけ？・・・
しまったあ！
思わずにおいをかいじまったよ！
強烈～・・・
ってコレアタシじゃねえよ！」

思わず体操服を投げ捨てると教卓まで走り、上にある座席表を確認して

「何だ、席替えがあったんだ・・・
あの席は？・・・
ははーん、マキコか。
あいつかわいいけどだらしねえんだよなあ・・・
いや、かわいいからだらしねえっつーか、うーん、どっちだ？・・・
あ、そう言や『体操服盗まれちゃったあ』って、嬉しそうに大騒ぎしてたの、マキコだよ。」

体操服を拾い上げて

「いやあ、しっかしひどいね～
机の中で発酵してるよ、コレ。
よくこんなの我慢してたもんだ。
まるで腐ったキムチ入れてるみたいなもんじゃねえか。」

体操服を廊下側の窓に干す。

「いや待てよ・・・
1学期にも盗まれたくせに、しょうこりもなく机に入れたままということは・・・
もしかして、わざとか？」

マキコの机の中を再び探ると顔をしかめ

「うわ、くっせー・・・
マキコなら、やりかねないな・・・
いや、絶対そうだ。
あいつ、『痴漢にあっちゃった～』って自慢するタイプだもんな。
嫌だねー・・・
え？アタシ？
どうせアタシは生まれてこのかた痴漢さんというものにお会いしたことは一度もございません！
こないだなんかうちに下着泥棒が出たのに、盗られたのは母さんのヒモパンツだったし、畜生！・・・
って何言ってるんだ、アタシ。」

マキコの机の中の物を出しながら

「お前、何しに学校来てるんだって。
教科書は全部置きっぱなしだし・・・
こんな雑誌も・・・」

ファッション雑誌が何冊か出てくる。

「まあ、アタシも似たようなもんだけどさ・・・」

干した体操服の所に行くと顔を近付け

「うーん。
やっぱスゲエにおいだ・・・
こりゃ、盗んだ方が気の毒だよ・・・
いや待てよ。
意外と変態チックなやつだと、かえって興奮したりして・・・
あー、やらしー！
ふ、ふ、（ついにおいをかぎ続け、妖しいムードに）
ヤバッ！癖になってきた。
これじゃアタシが変態だっつーの！」

突然携帯電話の呼び出し音が鳴り、慌てて出る。

「あ、か、母さん・・・
い、いや、別に慌てちゃいけないけど・・・
うん、今、教室・・・
すぐ終わる・・・
だから、まっすぐ帰るって！
・・・え？わかってるよ、明日海行くんでしょ・・・
準備なんかいらないって！（携帯を切る）・・・
ふっ。
あやうく変態ワールドに引き込まれる所だったよ、全く！」

教卓の座席表を手にとる。

「えーと、アタシの席は・・・
鈴木、鈴木・・・
あれ？アタシの席がねえじゃん・・・
もしかしてこのバッテンされてるとこか？」

その席に行き、中から教科書類を出していく。

「やっぱそうだ。
何か、ムカツク・・・
こないだまで籍があったんだから、バッテンまでしなくてもいいだろうに・・・
ま、どうせもう関係ねえけどさっ！」

教科書類を山積みになると、プリント類を1枚ずつ取り出して確認する。

「自宅学習調査票・・・
進路選択アンケート・・・
保健だより・・・
体育祭のご案内・・・
三者懇談会予定・・・
いらねえもんばっかだな・・・
これは？・・・
まんが甲子園の下書きだ。
我ながら、下手だねえ～
これは恥ずかしいから持って帰ろう・・・
まんが甲子園か・・・
やっぱマリはスゲエよ。
プロ級だもんな・・・
しかしアタシまさか部活に入とは思わなかったよ。
しかもアニメ部って。
オタクじゃん、丸っきり。
アタシが一番嫌いなタイプだよ。
あのアニメ声で『鈴木さん、アニメ部に入らない？』って言われたときや、冗談ならぶっ殺してやろうかと思ったよ。
そりゃ確かに授業中はマンガばっか書いてたけどさ・・・
わかんねえもんだよ。
いつの間にかあいつのペースでさ、2人でアニメ見たり書いたりしてたもんな。
まあ、マリのおかげだよ。
あいつがいなきゃ、アタシなんかとっくの昔に学校やめてたよな、いやマジな話。（まんが甲子園の下書きをバックパックに入れる）・・・
へえ、学級通信だって？
あの無精な担任が珍しいね。
なんせこれが第1号だもんな。
どうせ紙ヒコーキになんのにな。
一体何書いてんだろ？」

「学級通信」をしばらく読んでいる。

「クラスの雰囲気が良くなって来ました？・・・
まあ、アタシやマリが来てない方が雰囲気いいかも知れねえよな・・・
また盗難がありました？・・・
アタシが休んでる間にもあったんだ。
この学校泥棒がいっぱいいるんだね、最っ低え。」

廊下側のドアのところに行き

「学校くらい泥棒しやすい所もないよな。
教室にカギ掛けてないこと多いし。
『貴重品は管理しましょう』って言ったって、必ず財布とか入れたカバン置いてるやつがいるし。」

窓のところに行き

「カギ掛けてても窓が開いてて、面倒くさいから窓から入って開けたりするし。
それじゃ、ほとんど意味ねえっつの・・・

ま、盗られる方が悪いんだけどなっ！ 」

黒板のところに行き

「めざせ甲子園、か。
県大会のベスト4くらいで、大騒ぎしすぎだって。
アニメ部なんか全国大会だぜ。
誰も知らねえけど・・・
あ、でも本物の甲子園に行くんだぜ。
まんが甲子園だけど・・・
ま、アタシにはもう関係ないし、応援のしようもねえけどさ・・・
しかし誰もいねえ学校って何か変だぜ。
『今日は全校応援で、学校には誰もいません』って、そんなので本当にいいのか？
アタシが泥棒だったら・・・」

いくつか机の中を探って

「この学校、いくらでも泥棒のし放題だよ・・・
えっ？」

机の中から大きな財布が出てくる。

「コイツ、パッカじゃねえの？
ホントに財布置き忘れてるよ・・・
期末試験もそのまんま入ってるし・・・
山田かあ、はっはっは、さすがはバカの代表だね・・・
17点、20点に、5点？
こりゃアタシより一枚上だわ、さすがに5点はねえだろ。（笑いこけながら、探り当てた物に顔をしかめる）・・・
それに、コイツも体操服入れてるよ・・・」

山田の体操服をマキコの体操服の隣に干す。

「ほらよっ！
こいつらホント絵に描いたようなバカカップルだねえ。
2人でつるんで体操服置き忘れてんじゃねーよ！」

山田の財布を調べる。

「結構入ってるじゃん。
何でこんな大金置き忘れて平気なんだよ・・・
こういう時に限って先生も誰もいないし。」

財布を持ってウロウロする。

「持って帰ったら、アタシが盗ったみたいだし。」

財布をじっと見て困っている。

「大体、何でアタシが悩まなきゃならねえんだよ・・・
ついでに盗ってやってもいいけどさ・・・
それで・・・
学校やめるわけだし。」

携帯電話の呼び出し。
携帯に出る。

「・・・だから、まだ教室だって！・・・
え？
別に懐かしがるようなことあるわけじゃないじゃん。
何してるって荷物出してんのよ・・・
え？
うっさいなあ、ついでに泥棒してんの！・・・
冗談に決まってるじゃん。
教室に盗むような物あるわけないって、今夏休みだし・・・
うん、5時には帰るって・・・
え？何で？・・・
（大声で）ええっ！水着買うってえ？・・・
母さん持ってるじゃん、金ビカのやつ・・・
え、アタシ？
いいです、結構です、いりません！
どうせ派手なの買わせようとするんでしょ・・・
だからビキニなんかヤだっ！（電話を切る）
もう！
逆ナンするのに、娘をダシに使うんじゃねえよ！」

山田の財布を机の中に戻す。

「ふう、危ねえ危ねえ。
今度は犯罪に手を染めるとこだったよ。」

自分の机に戻ると、プリント類の整理を続ける。

「早いとこ、片付けなきゃ・・・
よく考えると、いる物なんか何もない気がするなあ。
ほっときゃ良かったか・・・
いや、こりゃ置いとけねえわ。」

模擬試験の結果を出している。

「模試の結果かあ。
見たくもないよ・・・
あ、でも思ったより悪くないじゃん。
E判定ばかりじゃないし・・・
アタシ、何一所懸命見てんだろーね。
もう全然意味ないのにさ・・・」

模試の結果をバックバックにしまう。

「3年なんだよな。」

黒板の方を見る。

「みんな野球の応援に行ってるのか。
マキコなんかチアガールやってんだろーな。
あいつ、この時期はこれに賭けてるからなあ・・・
野球のルールも知らねえくせに。
高校野球って変だよな。
他のクラブのやつまで応援に行ったりして・・・
自分たちのクラブは応援なんかねえのによ。」

黒板に近付き小さな文字を見る。

「うちのクラスは野球部が3人いるのか・・・
こいつらといつも仲が悪いやつまで、応援に行っちゃうのか・・・
ご苦労なこった・・・」

席の方へ下がる。

「でもみんな3年だろ？
そんなに浮かれてるヒマがあんのかよ？」

山田の席の中を探る。

「財布を忘れるくらいなら、模試の結果も・・・
お、あった！」

くしゃくしゃになった山田の模試結果を出してみる。

「こりゃ、ひでえ。(大笑い)
無理なとこ書きすぎだって。
はあ？
第一志望が東大で、第二志望が津田塾？(爆笑)
笑わせてくれるじゃん。
津田塾って女子大だっつーの！
パーッカ！」

大笑いしながら、山田の模試結果を机の中に戻し、他の机の中ものぞき込んでみる。

「みんな机の中に物入れすぎだね。
お前ら教科書持って帰って勉強しねえのか！・・・
ってするわけねえよな、当然・・・
おっと、この机は感心だね、何も入ってないよ。
いや、雑巾が入ってて綺麗に拭いてあるよ。
スゲエな、誰だあ、この机？」

座席表を確かめる。

「へえ、ユカリか・・・
人は見かけによらないとはこのことだな。
あいつ、なーんにも考えてなさそうに見えて、意外としっかりしてるんだ。」

座席表を見ながら

「と、言うことは、逆に真面目そうなやつが、意外とだらしなかったりすることもあるわけだ・・・
えっと、学級委員のケイコの席は・・・
あそこかっ！」

勇んで行ったケイコの机の中を確かめる。

「思った通り！
何これ？
プリントなんか全然持ち帰ってないじゃん・・・
テストなんかそのままだし・・・
うわ！スッゲエ・・・
こんな点数、アタシだったらうちで見せまくるけどねえ・・・
げっ！」

何か入った小さな箱を見つけてしまった。

「これはもしかして・・・
保健の授業で見た気がする・・・
確か山田が風船にして遊んでて先生にぶち殴られた、あれ・・・（中を開けて見る）
ヒョエーッ！」

動揺が隠し切れずあたりをキョロキョロ見回して警戒すると、わけもわからずその箱をポケットに入れようとする。

「お、おい、何やってんだ！
アタシが盗ってどうする！・・・
貰っても使いようがないぞ、とりあえず。」

さらに動揺は治まらずあたりを見回して警戒し、慌てて箱を机の中に戻す。

「あー、ビククラこいたー・・・
おい、ケイコ！
お前机の中になんつうもん入れてんだよ！
信じられないね全く。」

ケイコの机の中を再度調べている

「何か怖くなって来たよ。
あいつもしかしてスッゲエ遊んでるとか・・・
しかし、教室に置きっぱなしとは、ぶっ飛んでるよな・・・」

ケイコの机の中からさらにいろんな物を続々と取り出し、机の上に並べる。

「うーん・・・
メイク道具一式ってどこか。
しかしこの猫耳とか使えるのか？・・・
（着けてみて）お帰りなさいませ、ご主人さま・・・
って、怖いよ、オイ！・・・
まあ、そっち系の趣味の男には受けるかもな。
今度母さんに言ってみるか・・・
いや、冗談だって！冗談。
あの入本気にしそうで怖いよ・・・」

ケイコの机に全て戻すと胸をなでおろす。

「いやしかし女は怖いねえ・・・
お前が言うなって？
そりゃそうだ。
ま、女に比べりゃ男はかわいいもんだよ。」

隣の机に向かい

「ホラこれは男子の机だな。
スッゲエ落書き、きったねえの。
『佐藤』って彫刻刀で彫ってやんの。
ガキだね、全く。
何かすでに中身があふれてるよ・・・
男子ってやっぱいろんな物入れてんだろうな・・・
ヤダ、何でアタシ緊張してた？」

佐藤の机からプリントや教科書類を出して行く。

「何だ、普通じゃん・・・
あれ？」

夕陽のあたる教室

そういう雑誌を見つけてしまった。

「かーっ。
やっぱあったよお！・・・
ガキのくせに。」

ページをめくりながらウオッとかヒエーッとかいろいろと声を上げ、周囲を気にしながら机にしまう。

「こういうのは、家で隠れて見るよな・・・
いや、別にショックでもねえけどさ・・・
うちの倉庫には大量にあるからね・・・
母さん捨てねえんだもんな、父さんの持ち物。
自分は捨てられたくせに何考えてんだか・・・
そんなことはどうでもいいよ。
佐藤が持ってもおかしくはないか・・・
あ、でも学校に置くなよ、バカ・・・」

ぶつぶつ言いながら歩いていたが急に立ち止まると

「そう言や、サトシの席はどこになったんだ？」

教卓に向かって確かめる。

「ここか。
何だ一番前じゃん。」

座席表と席をよく確かめてゆっくりとその席に向かう。
席の前で、じっと見つめている。
意を決したように座り、懐かしそうに机を撫でてみる。

「もうそろそろ1年たつのかあ。」

しばらくして我に返り、慌てて机を離れる。

「何やってんだよ。
未練たらしいなあ・・・
母さんじゃあるまいし。」

しかし歩き去る途中で立ち止まってしまい、席に戻ると座り、机の中を探ってしまう。
サトシの教科書やノートを開き、机の落書きを懐かしそうにながめて

「あいつホント女みたいな字だよな・・・
何であんなやつと付き合ってたんだろ？」

さらにどんどん中身を出す、変な物の感触にギクリとする。

「何じゃコリヤ？」

取り出してみると何か入った袋。

「これ、星の砂じゃん。
懐かしい・・・
修学旅行の時沖縄で買ったやつだよ・・・
沖縄かあ、楽しかったなあ・・・」

1年前の沖縄修学旅行でサトシと行った土産物屋を思い出して、回想の1人芝居。
海の音が聞こえて来る。

「なあサトシ、これ見てみろよ。
『星の砂』だって。
キレイだよなあ・・・
え、サンゴとかのかけらだって？
お前物知りなんだな。
だけどよ、ほらここに書いてんだろ？
この小さなビンの中には、沖縄の真つ青な空と大きな宇宙が詰まってるって・・・
ロマンチック？
そりゃそうだよ。こんなキレイな海と空のそばにいるんだぜえ。
アタシだって女だからさ・・・
えっ？サトシが買ってくれるって？
いや、いいよ、結構いい値段だろ・・・
え？ホント買ってくれるのかよ。
アタシ嬉しいよお。
じゃ、じゃあさ、アタシもサトシに同じやつ買ってやるよ。
えーと、どれがいいかな・・・
これなんかどうだ？・・・」

ホント？
気に入ってくれた？・・・
よし、じゃ、これはアタシからのプレゼントだ。
絶対大事にしるよ。」

ふと我に返ると、相変わらずセミが鳴いている。

「あいつ、まだこんな物持ってたのか・・・
アタシなんか、とうの昔に捨てちゃったのに・・・」

袋の中にまだ入っている物に気付いて取り出す。

「まだ、何か入ってる・・・
え、これ、シャボン玉・・・
2人で祭に行ったとき買ったやつじゃん・・・
あいつホント照れ屋だから、はぐれないようにって手繋いだだけで緊張しちゃって。
あんなやついねえぞ、今時・・・
なーんか良くわかんねえけど、シャボン玉買って2人で飛ばしながら帰ったんだよな・・・
帰りは手繋ぐのも恥ずかしがっちゃって、あれって照れ隠しかよ、シャボン玉って・・・
まあでも懐かしいよなあ・・・」

シャボン玉を懐かしく吹いてみる。
歌を口ずさみながら

「シャーボンだーまーとーんーだー やーねーまーでーとーんーだー・・・」

あたり1面にシャボン玉が満ちるが

「やーねーまーでーとーんーでー・・・
こーわーれーてーきーえーたー・・・
アタシの恋も壊れて消えたかあ・・・
まさか、サトシのやつマリのこと好きになるとはなあ・・・
だけどあいつ、いまだにコクれないでやんの。
マリは、ぜんぜん気付いていませんよー。
バッカじゃない。
もうすぐ卒業だぞお！」

サトシとの思い出の品をきっぱりと机にしまって立ち上がりながら

「そう言や、マリの席はどこだろう？」

座席表を確かめてマリの席に行き、机の中を探る。

「やっぱプリントとか、たまってるよな・・・
おっと、模試の結果か。
見せてもらお。」

マリの模試結果を見て

「マリは頭いいもんなあ。
志望校だって真面目に書いてるし・・・
そう言や推薦の話がなくなったって、泣いてたよな。
それくらいですみゃ、どうってことねえよ。
アタシなんか退学だぜ・・・」

さらにマリの机を探ると大きなイラストが何枚も出てくる。
嬉しくなって目を輝かせながら

「イラストがいっぱい・・・
やっぱマリはうまいね、マジでプロ級だよ。
あーあ、才能の違いって言うのかなあ・・・
天は二物を与えずって言うけど、あれウソだね。
あいつかわいしいし、何やらせてもアタシより上だもんなあ・・・
まんが甲子園だってマリが行きや大丈夫だよ。
アタシなんかあの人の娘だからね、そもそも絵なんてガラじゃねえって。」

マリの物を机に戻すと立ち上がる。

「あーもう、今度こそおしまい！・・・
置きっぱなしにしての方が悪いんだよな、盗るやつも悪いけど・・・
いや、やっぱ盗るやつの方が絶対悪いんだけどさ・・・
こんなのほったらかすなよ、担任・・・」

教卓の中を探ると、大量のプリント類が出てくる。

夕陽のあたる教室

「ホラもう、ズボラだからなあ・・・
出席簿まで入ってるよ。」

出席簿を開いて見る。

「もう2か月になるのか・・・
アタシの名前、マジックで線引っ張って消してあるよ・・・
おとといやめたばかりなのに、手回しのいいこった。
よっぽどアタシにやめて欲しかったみたいじゃん。」

教科書類が積まれている自分の席に戻って

「お望みどおり、綺麗さっぱり消えてやるよ！・・・
だけど、この教科書とか持って帰んなきゃいけないのかよ？
みんな入れっ放しなのに・・・
ま、アタシはバッテンだからなあ・・・」

教科書をバックバックに詰めていると、携帯電話の呼び出し。
携帯に出る。

「・・・何だ、マリ？・・・
え、今教室・・・
何でって、持ち物持って帰んの、今日は誰もいねえって聞いたから・・・
ちょっと待てよ、今頃何言ってるんだ？
駄目だよ、そんなことバウしちゃ・・・
だからアタシはいいんだって。
どうせ学校やめるつもりだったし、いいきっかけになったよ・・・
ああ、そうだよ。
このまま店手伝ってくんだから、アタシ高校卒業する意味なんか別にないしさ。
母さんだって、『まあ、仕方ないねっ！』で、むしろ喜んでるくらいだから・・・
だから、これでもう店に出て先生が来たら隠れたりとか気い使わなくてよくなるし、今度触って来たらセクハラだって訴えてやるよ、教育委員会に・・・
うんマジ。
あいつ酔ってて気付いてないけど、2回触られたことがあるよ。
大体センセイって呼ばれる仕事のやつが一番たち悪いんだから、これ常識・・・
え？
母さんだって知ってるよ、本当のこと。
だけど友達を売ったりしたら、あの人の方が怒るよ・・・（長い間）・・・
わかってたよ。
学校続けたいんだろ、そうすればいいよ。
頑張ってる・・・
いや、別にアタシを犠牲にしてなんて、思ってくれなくていいから。
もう退学届け出しちゃったし・・・
だから、これまでどおりアタシが全部盗ったってことでいいから。
学校続けるんだったら、それこそアンタの立場まずくなるじゃん・・・
それに『まんが甲子園』、アタシの分まで頑張ってくる約束だろ？
おい、頼むから泣くなよ・・・（長い間）・・・
ふーん、今球場にいるんだ。
勝ったって？
良かったね・・・
え、明日決勝？
アタシ野球って興味ねえし・・・
後で電話するわ。
じゃ。」

携帯をしまう。

「明日は海で逆ナンする予定なんだけどな・・・
ま、そりゃいつでも出来るからいいんだけどね・・・
それにしても今さら説教すんなよな。
『高校は卒業しなきゃ意味がない』なんて、マリに言われたかないよ。
『一緒に学校やめよう』って最初に言い出したの、アンタの方だろ？・・・
ま、すんだこと。
校内の盗みは、全部アタシがやりました。
マリは、私にそそのかされて1回やっただけです・・・
それでいい。
それでマリは学校続けりゃいいんだよ・・・
ところであいつ、まだ盗みやってんじゃねえだろうな・・・
ああいうのって病気だし。」

マリの席に行き、優しい口調で

「ちゃんとしてくれなきゃ、学校やめたアタシの立つ瀬がないんだからね。」

教室後部の掲示板のほうへ歩いて行き、水着のポスターを剥がしてゴミ箱に捨てる。

夕陽のあたる教室

「こんなの剥がせよな、担任。
しかもビールの宣伝だよ、たく。
普段ほっぽらかして、たまにだけ見回ったりするんじゃないよ。」

隣に貼ってあるポスターを見て

「KAT-TUNじゃん。
これ持って帰ったら、母さん喜ぶかな？・・・
なわけねえか。
学校の物なんか持って帰ったら半殺しにされるよ。
あの人そういうの大嫌いだから。」

さらにその隣の写真が沢山貼ってあるところを見て

「体育祭の写真じゃん・・・
あの時見ちゃったんだよな。
サボろうと思って誰もいない教室に入ったら・・・」

回想シーン。
美奈、教室の入り口から入って来る。

「あー、カッター。
くそ暑いのに体育祭なんかやってらんねえよ。
あれ？
マリ？」

マリはまだ美奈に気づいていない。

「マリ！
何こそそしてんだよ。
そこお前の席じゃねえだろ？・・・
え？
お前何持ってるんだ？
マリ！
いいから見せてみるよ！」

そこへ、担任の先生が見回りにやって来たようだ。

「あっ！
せ、先生・・・
いや、忘れ物して・・・
え？
こ、これは・・・
違います・・・
うっせーよ。
違うっつってんだろうがっ！」

回想シーン終わる。

「お笑いだよな、始めっからアタシの方が悪者扱いだもん。
だんだん本当のこと言う気もなくなって来たよ。
ま、相手がマリじゃしょうがねえよな・・・」

マリの席を優しく見つめて

「いいんだよ、ホントの友達はあるただだからさ・・・」

写真を1枚剥がす。

「アタシが写ってるよ・・・
うわ、最悪の顔してる。」

写真をポケットに入れようとするが、思い直して元の場所に貼り直す。
これで二度と戻ることもないこの教室に、自分がいたあかしを残したいと思ったのだ。

「やっぱ、このまま貼っとくか・・・」

教室の前に向かって歩きながら

「高校は卒業しなきゃ意味がない、なんてアタシには通用しないよ。
やめたって、母さんと店やってくんだから、なーんにも困んねえしさ。」

一番前の席に座って黒板を見ながら

「勉強も、スポーツも、大嫌いだったけど・・・

夕陽のあたる教室

高校って結構楽しかったよ・・・
こんなボロ学校でもさ、アタシ来て良かったよ・・・
だってそう思わなきゃ、アタシ・・・
まるっきりバカだもんな。」

立ち上がって涙がこぼれそうになるのを堪えながら

「ははっ、何感傷的になってんだか。
ガラにもねえつつうの・・・
今日はアタシにとって出発の日だよ。
これからは自分で選んだ道を行くんだから！
絶対後悔なんかしねえんだから！」

後ろの黒板まで進むと「めざせ甲子園」の「めざせ」を二本線で消し「まんが」と書いて軽く笑う。
それから他の文字を全部消して「ガンバレよ」と大書して大声で叫ぶ。

「まんが甲子園！
がんばれよー！」

振り向くといつの間にか夕陽が教室に差し込んでいる。
時間を確かめて

「もうこんな時間だ・・・」

バックパックに自分の物を全部詰めて背負う。

「明日は決勝かあ・・・」

出席簿をきちんと閉じて教卓の上に置くと、入り口に向かい、入り口で教室の中に向かい深々と一礼する。

「アタシが行ったらみんなビックリするかな？」

美奈が出て行くと、照明が薄暗くなり夕陽がきれいに教卓上の出席簿を照らしている。

～おしまい～